



カナダ首相は、なぜ関西学院大学と上智大学を訪問したのか？ : ディーフェンベーカーの初来日について

著者	櫻田 大造
雑誌名	関西学院史紀要
号	26
ページ	7-41
発行年	2020-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028590

カナダ首相は、なぜ関西学院大学と上智大学を訪問したのか？

デューフェンベーカーの初来日について

櫻田 大造

I はじめに

二〇一八年には、第四位の貿易相手国だったにもかかわらず、カナダにとっての日本に関する先行研究は極めて限られている。とくに英語文献でも邦語文献でも圧倒的に足りないのは、カナダにとって最も重要な対米関係で蓄積されているような、首脳会談などの研究である。⁽¹⁾あるいは、首脳会談から派生する、象徴的に重要な相手国訪問に関する研究である。本論では、その先行研究の欠如を埋めるためにも、史上ふたりめのカナダ首相として、日本を訪問したジョン・G・デューフェンベーカー (John Diefenbaker) の関西学院大学訪問 (一〇月二九日) に焦点をあてる。⁽²⁾一九六一年一〇月に五日間にわたる、国賓としての公式訪日を実施したデューフェンベーカーは、数多くある日本の大学の中で、わざわざ関西学院大学を選び、ランバス記念礼拝堂の日曜礼拝式に参加し、大学に、カナダ大百科事典 (Canadian Encyclopedia) 全十巻の寄贈を約し

たのであった。^③ 関西学院の他には、上智大学にカナダセンターや学生有志によるカナダ研究会ができていたために、一〇月三一日に訪問したことを除くと、東京大学や京都大学などの日本を代表する大学を訪れていない。

本論では、最近ディーフェンバーク外交が再評価されている、学術的文脈も加味しつつ、^④ 国賓として訪日したこのカナダ首相が、なぜ関西学院大学を選んで訪問し、特別礼拝式の「日課を讀んだ (read the lesson)」のかを、説明する。また、同じくキリスト教系とはいえ、カトリック系であり、自らのプロテスタント系とは宗派の異なる、上智大学への訪問も^{そしょう} 組上に載せ、両訪問の比較も試みる。さらに、訪日の最大目的だった日加首脳会談の結果も加味する。三回の日加首脳会談などでは、友好関係強化と国際情勢への認識をかなり共有でき、その意味ではある程度の高評価が可能となる。ただし、全ての二国間争点を一気に解決したわけでもなく、日本の一部では『日本経済新聞』にみられるように、日加閣僚委員会設置の日時が決まらないことを疑問視し、なお一層の「親近感」を求める動きもあった。

政府レベルでの会談や交渉のみが、訪日目的だったのならば、より短期間の滞在に留めたり、あるいは逆に、会談回数を増やすこともできたであろう。外訪は、ディーフェンバークにとつて、外交政策をカナダ国民に誇示することも意味する。とくに、元外相であり、ノーベル平和賞受賞などで外交手腕を評価されていたレスター・ピアソン (Lester Pearson) 自由党党首 (野党第一党) への対抗策として、有効な面もあるからだ。そうしなかったことから、政治的な野心からの訪問というよりも、純粹な宗教心から、関西学院をカナダ首相は訪れたと理解できる。つまり、学内外のキリスト教徒との懇親を深めたかったための来学と言うことになる。一方で上智

大学への訪問は、日本国内で最初にできた、カナダセンターへの謝意を表しつつ、カナダ国内のカトリック教徒へのアピール面もあった。

Ⅱ ディーフエンベーカー政権と政治概要

これまでの主要な英語先行研究によると、進歩保守党党首ディーフエンベーカーの外交政策全般は、あまり高く評価されてこなかった。外交（対米関係）が争点となった総選挙敗北を受けての退陣で、彼の統治が終了したことが、その主要因である。そもそもディーフエンベーカーがカナダ下院総選挙で勝利したのは、「大番ぐるわせ」の感があった。選挙戦で十分な人数の候補者をたてなかったなど、油断していた自由党のルイ・サンローラン (Louis Saint Laurent) 政権に対し、進歩保守党のディーフエンベーカーは、一九五七年六月一〇日の総選挙で、二六五議席中一一二議席を得て、自由党の一〇五議席を上回り、組閣を開始。ただし、この政権交代は少数与党政権だったために、翌五八年三月三一日にディーフエンベーカー首相は、解散総選挙に打って出る。ディーフエンベーカー率いる進歩保守党は、ケベック州レベルでモリス・デュプレシ (Maurice Duplessis) 州首相（保守的なユニオン・ナショナル党党首）の支持を得たり、野党第一党のピアソン自由党党首への攻撃に成功するなどして、二六五議席中二〇八議席もの、憲政史上最大の大勝利をおさめたのであった。⁵⁾ その立役者のディーフエンベーカーは、四年後の総選挙（一九六二年六月一八日）では経済不況などもあり、少数与党政権しか樹立できず、政局が流動化。最終的には一九六三年四月八日の総選挙で、自由党のピアソン党首に敗北し、下野してしまう。

元外交官で、外相として一九五六年のスエズ危機時に、国連平和維持軍を組織して、英仏イスラエル軍をエジプトから撤去させるのに寄与したピアソンは、当該総選挙で、二六五議席中一二五議席を獲得。九五議席のみに留まった進歩保守党のデューフェンベーカーを破り、自由党少数与党政権へと、政権奪取したのである。⁽⁶⁾

デューフェンベーカー政権崩壊の引き金となったのが、少数与党政権下での下院不信任決議案可決である。⁽⁷⁾ 当時米国のジョン・F・ケネディ (John Kennedy) 政権との間で議論となっていた、核弾頭のカナダ国内持ち込みやカナダ軍への配備問題が、具体的な争点となっていた。デューフェンベーカーは、北米防空司令部 (North American Air Defence Command = NORAD) および北大西洋条約機構 (North Atlantic Treaty Organization = NATO) 分属カナダ軍への核弾頭配備に対して、対米文書の形で約束しつつも、その実行を遅延^{ちえん}させていた。そのようなデューフェンベーカー政権に対し、自由党やその他の野党がしびれを切らしたことが、内閣不信任案可決の要因である。デューフェンベーカーの反米・反核的言動に対して、NATOおよびNORADでコミットしていた集団的自衛権に基づき、カナダ軍への核弾頭装備に賛成したピアソン自由党首が、総選挙に勝利したのであった。

Ⅲ 訪日に関する先行研究の不足

これまでの主要邦語文献のみならず、英語文献でも、デューフェンベーカーによる訪日は、主要テーマとなっていない。まずデューフェンベーカー自身の回顧録がその代表となろう。前任者の

サンローランと違って、デューフェンベーカー自身は、三巻にのぼる回顧録を執筆している。回顧録にありがちな、自分の政策に対しては、「事実関係を超えた自己弁護」も見られるが、日本に関しては記述が少ない。その数少ない記述の中でも、敢えて掲載されているのが、一九六一年六月の池田隼人首相によるカナダ訪問時の様子である。⁽⁸⁾そこでは、ディナーをとりつつ、両首脳が会談した様子が描かれている。そして結果的にデューフェンベーカーは、日本国内におけるカナダ産小麦市場拡大に、池田が熱意を示すような説得ができたと記している。なお本論対象にあたる、その後の、カナダ首相自身の訪日については、全く触れられていない。

デューフェンベーカー外交を語る際に必ず出てくる、政策決定者の文献として挙げられるのは、H・バジル・ロビンソン (Basil Robinson) 首相特別補佐官の回顧録である。⁽⁹⁾二二年ぶりの政権交代を受け、時にはギクシャクする首相官邸と省との調整役として、外務省から出向し、カナダ首相の事実上のアドバイザー役を、ロビンソンは務めて来た。そのロビンソンの回顧録でも、自らも随行した訪日そのものは、「紙幅の関係で」主要な記述がない。その代わりに、「とりわけメキシコ、アイルランド、北アイルランド、そして日本」への加首相訪問は、デューフェンベーカーと「いつも内助の功があった彼の妻、オリバーが、カナダにとって多くの友人をつくり、その後来る試練に備えてリフレッシュできた」とのみ記している。

より客観的に書かれた英語文献も、似たような感じである。カナダの政治経済情勢をほぼ同時代的に分析した、最も権威ある『カナダ年鑑 (Canadian Annual Review)』シリーズは、日本について貿易関係のみに、主要焦点を当てている。香港と並んで日本からカナダへの電化や繊維製品に対する保護主義的政策が、デューフェンベーカー政権によって提示されたことが述べられ

た。その結果、一九六一年五月一九日には、ドナルド・フレミング (Donald Fleming) 蔵相が、自国への割当枠を厳格化することで、日本による対加輸出自主規制が締結されたことを発表した。前述したように、一〇月のディーフェンベーカー訪日は、同年六月に日本国首相が訪加したことへの返礼であったが、東京では池田が、この輸出自主規制への不満を漏らしたとも指摘。にもかかわらず、長期的に見て、カナダの保護主義は日本にとっても利益になると、カナダ首相は主張し、カナダの政策を正当化したことが述べられている。⁽¹⁰⁾

主にカナダの新聞や週刊雑誌などを素材にした、この時代のカナダ外交について最も包括的な研究といえる、リチャード・プレストン (Richard Preston) による先駆的研究では、二八九頁の本文中、日本は九頁しか出てこない。そこでは、一度もディーフェンベーカー首相の訪日は取り上げられておらず、なおかつ日本に対する最も長い言及は、一九五〇年代後半からカナダの繊維産業の国際競争力が、日本と比較して、劣ってきたという事実の列記だけに留ま⁽¹¹⁾っている。

さらに、ディーフェンベーカーの伝記としては、最も包括的に資料を涉^{しより}獵して書かれた、デニス・スミス (Denis Smith) による『ならず者の保守党员 (The Rogue Tory)』がある。この傑作でも、日本に関する言及そのものを、一九四一年の真珠湾攻撃のみに絞っている。対米関係、経済運営、あるいは英連邦における南アフリカ共和国への態度のような、より重要な案件がディーフェンベーカー時代には、山積していたとの印象を、この研究は与えている。⁽¹²⁾

日加関係に焦点を絞った先行文献も、似たような結果である。⁽¹³⁾一九八〇年に発刊された日加関係についての国際会議の報告集は、キース・A・J・ヘイ (Keith Hay) 編集の先駆的な刊行物であったが、一九六一年の両国首脳相互訪問については、議論の対象としていない。フランク・

ラングドン (Frank Langdon) の古典的研究も、この時代の多国籍制度において、日加関係を位置づけようとしているが、ディーフェンベーカー首相の来日には触れていない。

反面、これらと比べて若干詳しい取り扱いもないわけではない。たとえば、クラウス・プリングスハイム (Klaus Pringsheim) の研究は一八七〇年から一九八二年までの日加関係を取り扱い、包括的に描写している。その研究でも、一九六一年のディーフェンベーカー訪日に関しては、後述するフランク・ブル (Frank Bull) 駐日カナダ大使の証言を、記録していることが目立つのみで、一九五〇年代後半から六〇年代前半の二国間関係を「一連の前向きかつ相互互恵的な発展」があったと、みなしているだけだ。さらに、二〇〇八年に発刊された、日加関係史の英文論文集でも、大きなトピックとはなっていない。パトリシア・E・ロイ (Patricia Roy) が、ディーフェンベーカー首相は一九六一年来日時に、カナダ国内で企業経営や技術供与を望む日本人およびその親族への永住権を、一五〇名まで認めると発表したと特筆。その結果、この永住権拡大が日本のマスメディアで評判になったと、書いているのみである。

唯一の例外として、ディーフェンベーカー訪日時の関西学院大学訪問に言及しているのは、ジム・キャンベル・ミラー (Jim Campbell-Miller)、マイケル・キャロル (Michael Carroll)、そしてグレッグ・ドナヒー (Greg Donaghy) による、ディーフェンベーカーのアジア外交再評価論である。論文集の中のこの一章は、日加閣僚会議への賛同とともに、日本人がカナダに入国する際の規制緩和を、カナダ首相が発表したと述べた。その上で、関西学院大学での日曜礼拝式に、ディーフェンベーカーが参加した事実も、彼らは付け加えている。⁽¹⁴⁾

なお、邦語文献も似たように、研究発展の余地を残している。最も包括的にこの時代の日加関

係を取り扱った、大熊忠之による学術論文では、多国間争点において、当時の池田首相とデューエンベーカー首相が合意したことを記し、この時代のカナダ外交を「普遍主義」を特色とするという、ユニークな結論を提示している。「普遍主義」の枠組みで、二国間関係を発展させる試みは、実際この訪問時にも存在し、まさに共同コミュニケーションや記者会見でそれらは明らかにしている。その一方で、デューエンベーカー首相来訪時の行事などは詳述されていない。⁽¹⁵⁾

Ⅳ 池田隼人首相との三回の会談

この時のカナダ首相国賓訪日の最大目的は、昭和天皇皇后両陛下との会見や午餐^{ごう}を除くと、日本国首相との会談であったことは間違いない。⁽¹⁶⁾日程中、一〇月二七日、二八日、三十一日の三日間を池田首相との会談にあてている。日加友好促進と国際情勢の意見交換が主な議題となった。具体的には、両国の貿易拡大、すでに約しあっていた日加閣僚委員会の発足、日本の経済協力開発機構（Organization for Economic Co-operation and Development＝OECD）への加盟問題、国際連合などでの日加協力の推進および核軍縮の追求などであった。加首相の離日前に発表された共同コミュニケーションなどによると、東西ドイツのベルリン封鎖問題や中国や南北ベトナムを含む東南アジア情勢に関して、相互分析を確認しあったことがわかる。さらに、ソ連が計画した大規模核実験には、断固として反対し、国連などの機関で、「すべての核爆発実験が直ちに停止され、かかる実験が実効的な国際的な査察の制度によって永久に禁止されるような条約締結の話合いが早急に再開されること」が必須だと、両首脳は共同で述べている。国連総会における日加協力

強化で軍縮を推進することにも、首脳レベルで合意を得た。

このように、ケネディ米政権との間に抱えていたような、深刻な加米摩擦は、日加間ではほとんど見られない。一方で特に日本側の政策目的が完全に達成されないような、二国間争点も存在していた。^① その一つは、日本のOECD加盟問題であった。加盟に対してカナダの支持を求めた池田に対して、デューフェンベーカーは、加盟国の中には、日本を正式に認めることに反対している勢力がいると指摘しつつも、加首相自身は日本の「加盟申請に好意的な」立場をとると発言。日本の加盟によりOECD自体が強化されると、カナダはみなしていたからである。ただし会談の最後で、日本加盟に関してカナダは好意的に考慮してくれている事実を、内閣官房長官声明として出してよいか、小坂善太郎外相がデューフェンベーカーに尋ねたところ、やんわりと断られた。カナダ首相によると、公式発表は「時期尚早」であり、カナダが「世間の注目なしに」秘密裡に行動した方が、関係者全員にとってよいと応じている。日本側もこの戦術に同意したようである。

また、日加貿易がカナダ側の輸出超過になっていたことも日本側は問題視していた。会談では、日本は北米との間に五億ドルの貿易赤字を抱え、それが東南アジア諸国との間の二億ドルの貿易赤字につながっていると、小坂外相が伝えた。そのために、東南アジア諸国から多くのクレームが来ており、それが政治的にも経済的にも望ましくないこと、さらに、カナダとの貿易赤字削減のために、既存の日本側の対加輸出自主規制、すなわち、対加輸出枠の削減を望んだ。カナダ側の答えは、両国が加盟している協定の枠内で、「相互に利益のある貿易を秩序ある基礎の上にいつそう拡大する」との「再確認」を、コミュニケで謳いつつも、個々の争点に関しては、閣議で議

論することを約したのみであった。さらに、東京滞在中に、カナダが日本に貿易面で「最恵国待遇」を与えている数少ない国家であることも、ディーフェンベーカーは池田に、思い起こさせている。なお、この日加貿易不均衡の解決策として、池田は日加閣僚委員会の設置日時を、ディーフェンベーカー来日中に発表することも求めたが、その点も期待外れにおわった。一九六一年一月一日付の『日本経済新聞』は、カナダが総選挙前の政治状況にあることと、米加関係と異なり日本との関係は「親近感が薄かった」ために、具体的日程が決められなかったと、解説した。それに対して、日本財界は、閣僚委員会開催が決まったこと自体を、対加関係強化とカナダ国内への日系企業進出の足場になるとみて、歓迎している。実際、一九六三年一月には日加閣僚委員会が発足し、東京で会合を開催し、当時のブル駐日加大使は、「とてもうまくいった」と、評価した。⁽¹⁸⁾カナダとの貿易関係もその後拡大し、一九六〇年の二億八千九百万ドル（日本にとって六千九百万ドルの対加輸入超過）からディーフェンベーカー政権末期の一九六三年には、四億二千六百万ドル（一億六千六百万ドルの対加輸入超過）まで、順調に伸びて行った。⁽¹⁹⁾

V 関西学院大学訪問を決定した過程

このような旅程で、最重要公務である会談を実施しつつ、ディーフェンベーカー首相は関西学院大学を訪問した。なぜ敢えて関西学院にしたのか、当時の状況からはいくつかの要因が考えられる。まずディーフェンベーカー自身が、敬虔な^{けいけん}プロテスタントのバプテリスト派キリスト教徒だったことが大きい。日曜礼拝式出席も欠かさなかったために、関西学院大学側では、フランシ

ス・ミューア (Francis H. Muir) 師とイアン・マクロード (Ian MacLeod) 師が出迎え、首相自身「日課を読み上げることを行った」記録が残っている。⁽²⁰⁾ その後一〇月三〇日にも、ディーフェンベーカー夫妻は、横浜にある英連邦戦死者墓地で祈りをささげた後に、バプティスト教会による特別礼拝式にも参加している。これらのことから、当時の社会情勢における宗教や信仰の重みや、ディーフェンベーカー首相夫妻にとつてのキリスト教の重要性が、理解できよう。

具体的な決定過程をみていこう。今回の訪日は、そもそも六月に実行された池田日本国首相の訪加への返礼、すなわち、相互訪問の一つとして計画された。⁽²¹⁾ カナダ側の資料によると、八月九日付のブル駐日カナダ大使からのカナダ外務省宛て通達で、一〇月下旬に加首相が訪日することを池田首相も望んでいること、そして「日本が継続して西側諸国の政策に同調することが極めて重要な時期」であり、日加関係強化に役立つと述べている。さらに、加首相訪日が少なくとも五日間以上になることで、東京以外の場所を訪問し、地方の発展や歴史的建造物も見学されることを、ブル大使は意見具申した。八月三〇日付けの日本からの通達によると、当時の小坂外務大臣が、具体的に京阪神への訪問も含め、少なくとも六日間の対日滞在を望む招聘を行っている。ただし、在日期间を決めるのは、あくまでもディーフェンベーカー本人であることも、日本側は理解していた。実際、訪日を受諾する九月六日付けの打電文書では、スケジュールの関係で六日間の滞在は不可能であるし、ほかの閣僚は訪日一行には含まれないが、カナダのマスメディア関係者は同行することが、明らかにされていた。

訪日期间が、一〇月二六日羽田空港着で、三一日に羽田発と決まると、日曜日をどう過ごすかも課題となる。ディーフェンベーカーが望んだのは、二九日日曜日の礼拝式への参加であり、関

西地方で検討することとなった。当初は京都付近にデューフェンベーカー所属のバプティスト教会がないか、探したが、九月一八日付の本省資料には、それがなかなか難しいと書かれている。さらに、訪日旅程がほぼ決まった、九月二八日付けカナダ外務省資料にも、カナダ系のバプティスト教会などの京都地域における所在調査の必要性も、付け加えられている。適切な教会が準備できるかどうかということ、関西でカナダ人宣教師等と会う予定を組むことも、駐日カナダ大使館の役割とされていたのである。

結果的には、ブル大使などの推薦が効いたようで、一〇月一〇日付けのカナダ外務省から駐日カナダ大使館に宛てた打電文書で、デューフェンベーカーが関西学院で開催される特別礼拝式に喜んで参加する意向が示されている。また、デューフェンベーカー首相に送られた一〇月一六日付の関西学院からの書簡では、首相参加への謝意と今回の礼拝式があくまでも非公式的な性格であるとされた。この書簡を送ったのは、後述するロイド・B・グレアム (Lloyd Graham) 教授を長とし、ミューとマクロードが名を連ねた招聘委員会であった。興味深いことには、この書簡で、わざわざデューフェンベーカー首相に対して、礼拝式中に、新約聖書の「使徒言行録」十六行から三一行の「日課を読む」ことを依頼しており、実際、彼はそれに応えたのであった。

この宗派を超えたプロテスタント礼拝式に、現役の内閣総理大臣を参加させるにあたり、かなりの下準備も行ったようなカナダ側の形跡もある。まず、一〇月二〇日付けの打電文書で、ブル大使は、自ら関西学院のキャンパスを訪問し、「大学当局やカナダ人スタッフメンバーが、首相とその一行に対して、適切な礼拝行事を供するための努力をしていることに感銘した」と記している。招聘委員会のカナダ人教員などに対する調査も、カナダ外務省は怠ることはなかった。C・



ディーフェンベーカー加首相と小宮孝関西学院院長
(学院史編纂室所蔵)

J・L・ベーツ (Bates) 博士や H・W・アウターブリッジ (Outerbridge) 博士が、関西学院の発展に寄与したことや彼らなどを通じて、カナダとの縁が深いこと、そして当時五名ものカナダ人専任教員がいたことと、その履歴などもまとめられている。⁽²²⁾

VI 関西学院大学への訪問、礼拝とその後

ディーフェンベーカー首相の来学について、当時の学生新聞である、『関西学院新聞（現在の関西学院大学新聞）』などは、以下のように伝えている。⁽²³⁾ 一行二〇名を伴い、ディーフェンベーカー首相は、関西学院大学上ヶ原キャンパスのランバス記念礼拝堂に、朝八時半に到着。一五分間、関西在住のカナダ人などと歓談した後に、小宮孝院長および堀経夫学長をはじめとする、関西学院関係者約百名とともに、礼拝式を実施した。

礼拝式そのものは、ミューア師によって実施され、説教をしたのは、マクロード師だった。両者ともカナダ合同教会の牧師であった。さらに、特別礼拝式の招聘委員会には、一九五八年に同教会から赴任した宣教師兼専任教授として、グレアムも参加していた。⁽²⁴⁾ グレア

ムは、一九二二年にアルバータ州カルガリーで生まれ、第二次世界大戦前の約二年間、カナダ政府の日本語教育プログラムを受講し、日本語を学び、終戦後には、連合国軍最高司令官総司令部 (General Headquarters = GHQ) の通訳・翻訳官などを務めた。

一旦、カナダに帰省したグレアムは、一九五〇年にトロント大学大学院修士課程で社会事業学 (social work) の修士号を取得後、一九五一年にカナダ合同教会の宣教師として再来日。横須賀キリスト教社会館や日米孤児救済合同委員会などで、牧師として社会福祉の実践活動に従事し、日本語にも極めて堪能だった。その後の一九五六年から二年間、カナダに帰国し、トロント大学大学院博士課程で学び、同大における社会事業学博士 (Doctor of Social Work = DSW) 第一号を取得し、関西学院大学助教授として赴任していた。グレアムは、一九六〇年の開設時に、社会学部教授にもなり、一九六六年三月にトロント大学教授として帰国するまで、「社会福祉組織論」などを教えた。そして、今回のデューフェンベーカー訪問の発起人的役割をもおっていた。実際、グレアム教授がデューフェンベーカー首相のための特別礼拝式の長として、駐日カナダ大使館を通じて、いろいろな手配を実行した記録が、一部残っている。デューフェンベーカー首相自身も、出身や選挙地盤がアルバータ州であり、グレアムと同郷だったということも、招聘には有利に働いたのかもしれない。

実際の特別礼拝式は、祈りや讃美歌『聖なる、聖なる、聖なるかな ("Holy, Holy, Holy")』の合唱などから始まった。その後デューフェンベーカー首相は自ら、聖書の日課として、「使徒言行録」の第十七章の一部を引用した。現存する当時の礼拝案内によると、具体的には、デューフェンベーカーは、以下の内容を英語で朗読したことになっている。⁽²⁶⁾

「16 さて、パウロはアテネで彼らを待っている間に、市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた。

17 そこで彼は、会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた。

18 また、エピクロス派やストア派の哲学者数人も、パウロと議論を戦わせていたが、その中のある者たちが言った、「このおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほかの者たちは、「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った。パウロが、イエスと復活とを、宣べ伝えていたからであった。

19 そこで、彼らはパウロをアレオパゴスの評議所に連れて行って、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。

20 君がなんだか珍しいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」と言った。

21 いったい、アテネ人もそこに滞在している外国人もみな、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることのみに、時を過ごしていたのである。

22 そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立って言った。「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは知っている。

23 実は、わたしが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく知っているうちに、『知れない神に』と刻まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう。

24 この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。

25 また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、

26 また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。

27 こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびひとりから遠く離れておいでになるのではない。

28 われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。

29 このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。

30 神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。

31 神は、義をもつてこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」。

なお、祝^{きと}祷は今田恵関西学院元院長（当時理事長）によって行われ、記念品贈呈（presentation）は小宮院長によってなされた。ほかに、『イエス、汝は愛する心のよろこび（"Jesus, Thou Joy

of Loving Hearts”)』や『東や西^{ひがし} (‘In Christ There Is No East or West’)』の二曲の讃美歌も歌われたのであった。以上のおぜん立ては、主に関西学院側が実施したが、それを受諾した事実からは、人権を重んじ、カナダの一体化を目指した、デューフェンベーカーのキリスト教徒としての選好も見えて取れる。実際、デューフェンベーカーの回顧録は、首相になる前の第二次世界大戦中のマッケンジー・キング (Mackenzie King) 自由党政権の政策を、批判の対象としている。とりわけ問題視されたのが、キング首相による日系カナダ人の財産没収と抑留 (強制収容) 策であった。

デューフェンベーカーは一九七五年という、まだ日系カナダ人に対する損害賠償や名誉回復などのリドレス (redress) 運動が本格化する前に、以下のように回顧録にわび^{わび}を記した。「戦時において、安全保障と生存が重要だという原則を私は疑うことはなかった」ものの、ある集団「全部の人々を対象にして、人種を理由にかれらを悪人として誹謗中傷^{ひぼうちゅうしょう}することを、私は受け入れることができなかった」と。むしろ、政敵である自由党のキングやサンローラン政権への対抗策として、このようなデューフェンベーカーの日系カナダ人擁護を捉えることが、出来るかもしれない。さらには、自分 (の父方先祖) がドイツ系移民であり、自ら出征^{しゅつせい}した第一次世界大戦中のドイツ系カナダ人に対する加国内での憎悪を、日系カナダ人の辛苦と重ね合わせた面もあるようだ。いずれにせよ、回顧録では、日系カナダ人に対する抑留政策を「間違いだった」と、言い切っていることから、人権重視、東西の一体化、弱者保護などのデューフェンベーカーらしさも、今回の訪問では垣間見られる⁽²⁷⁾。

九時半頃終了した礼拝後、記念品の贈呈式が行われた。小宮院長はカナダ首相に学院のスピー

ンと花瓶を記念品として贈り、カナダ首相はカナダ大百科事典全一〇巻の謹呈きんていを約した。その際、小宮院長は次のような祝意をカナダ首相に対して伝えている。

「関西学院を代表して、院長である私は、関西学院にお越しいただいたことに対する榮譽への謝意と首相ご一行皆様、礼拝式にご参加されたことへのよろこびを表したい。

七二年前の創立直後から、関西学院はカナダのキリスト教徒から物質面および信仰面でも多大な恵みを受けてまいりました。過去には、私たちの院長であった、ベーツ博士とアウターブリッジ博士は、カナダのご出身でした。そして私たちは、これらおふたかたや現在幣学に勤務されている、ほかの多くの宣教師の方々を派遣してくださった、カナダにおられるキリスト教徒に感謝しております。

教職員や学生団体などのメンバー全員を代表して、私は今や、デューフェンベーカー首相および令夫人に対して、この機会に対する、私たちのよろこびとわが大学への歓迎の意を示します。感謝の意を込めたこの友好の証を、どうぞお受け取りください。

カナダのキリスト教徒の皆様に対して、私たちは、今後続く友好関係をお祈り申し上げ、さらにデューフェンベーカー首相と令夫人、それにご一行皆様におかれましては、これからの快適なご旅行と安全なご帰国をもたれることを、お祈り申し上げます。」

この挨拶後、加首相と一行二〇名は、関西学院グリークラブが校歌『空の翼』などを歌唱する中、時計台から本部前と中央芝生をゆつくりと回り、約一時間の来訪を終えた。その後、奈良と京都への観光に出かけている。なお、カナダ首相の日本着が、飛行機の都合で、一五時間遅れたにもかかわらず、来学が実施されたことも『関西学院新聞』は特筆している。⁽²⁸⁾



ディーフェンベーカー加首相と在日カナダ人
(学院史編纂室所蔵)

一月には、カナダ大百科事典が関西学院大学の図書館に納入された。⁽²⁹⁾同年一月二四日付で、小宮院長はディーフェンベーカー首相夫妻に対して、訪問と礼拝参加への再度の謝辞を書簡にしたためている。その中で、カナダ大百科事典が「大学図書館にとって、貴重な入手図書」であり、カナダという「偉大な国家に関するきわめて素晴らしい参照文献」となるのみならず、訪問を刻む「永久的な記念品」になることも、感謝している。書簡文末にて、ディーフェンベーカー首相、そのご家族、そしてカナダの人々、さらには加首相による平和へのご努力が実ることに、神のご加護があるよう、再度お祈りをささげていた。

ディーフェンベーカー自身も、関西学院訪問はいたく気に入ったようだ。⁽³⁰⁾礼拝式において重要な役割を果たした、ミューとマクロード宛てに、各々別々に、一〇月三〇日付御礼書簡を送っている。両書簡では、グリーククラブが送別時に歌った、『神共にいまして (God Be with You till We Meet Again)』を特に素晴らしかったと、べた褒めしている。関西学院大学の所在地を「大阪」！と誤記していることを除くと、ミューに対しては、礼拝式を「深く感動的な体験」であり、「あらゆる面で素晴らしかった」と述べ、マクロードの説教を、「極めて印象的」で、「東洋における

福音伝道的作業の問題について新しい視座」をもたらしてくれたと、高く評価した。

後述する上智大学との対比も、本章で明確にしておかねばならない。上智ではすでに学生有志とイエズス会司祭（神父）兼専任教員によるカナダ研究会とカナダセンターもできていたこともあり、デイーフェンベーカー来訪は、ある意味、さらに大きな種を撒いた。現役カナダ首相との懇談に、おおいなる刺激を受けた学生の中には、留学したり、情熱をもって研究を推進するものが出てきた。対する関西学院では、カナダへの留学などは実施されたものの、本格的な地域研究はやはり一九七〇年代以降であろう。一九八一年度後期から、カナダ政府との協定に基づくカナダ研究プログラムが、スタートし、カナダの大学から客員教授を招聘している。⁽³¹⁾

VII 上智大学への訪問

上智大学は、そもそも日本に初めてキリスト教をもたらした、フランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier) が構想し、イエズス会が一九一三年に開設した、カトリック系大学である。そのイエズス会系姉妹校としては、各種の全世界大学ランキングで上位にあがる、米国首都ワシントンD・Cにあるジョージタウン大学やニューヨーク市にあるフォーダム大学などが有名である。⁽³²⁾ カナダではケベック州を中心に、オンタリオ州の一部でも、カトリック教徒や修道会が多く、アメリカ合衆国と異なり、プロテスタント教徒よりも人数面で凌駕^{りようが}していた。

カナダのカトリック教徒と日本のカトリック教徒もつながりがあり、上智大学は神学部を持ち、日本人カトリック司祭育成機関としての役割も、果たしていた。その上智大学では、一九五七年

にカナダセンター設置準備委員会ができ、駐日カナダ大使館から、一五〇冊のカナダ関係文献の寄贈を受けることになった。翌一九五八年には、日本国内唯一のカナダセンターを設置。その後一九六〇年にも、駐日カナダ大使館から、カナダ関連図書や定期刊行物を寄贈されている。このように、カナダ大使館（カナダ外務省）の協力の下で、現在の日本カナダ学会などの学術研究団体が発足する前から、カナダ研究を重視し、カナダ研究の嚆矢（こうし）となっていたのが、上智大学カナダセンターだったと言えよう。⁽³³⁾

当時、上智大学には、カナダのオンタリオ州出身イエズス会神父で、専任教員のコンラッド・フォルテン（Conrad Fortin）がいた。まさに彼が、日加の「友好促進を目的」とした当該センターを発足させたのである。カナダセンターでは、カナダに関するセミナーやカナダ情報の提供のみならず、学生に対してカナダへの留学奨学金授与まで実施していた。なお、その後、一九八七年にはこのカナダセンターを発展解消する形で、アメリカ・カナダ研究所が設置され、北米関連の研究セミナーや紀要発行など、各種の活動を積極的に実施して、現在に至っている。⁽³⁴⁾

なお上智大学では、カナダセンターの一部門、かつ学内文化関連組織の同好会として、一九六〇年二月には「カナダ研究会」が、有志学生により発足していた。この研究会はカナダ大使館からの協力も仰ぎ、一九六一年には十五名のメンバーも属し、一九六〇年の年末から機関誌にあたる『かえで』も発刊するに至った。その上、この研究会からふたりの学生が、一九六二年夏にはカナダに留学する予定でもいた。⁽³⁵⁾

おそらく当時の日本の大学で、最もカナダ研究に熱心だったのが、この上智大学のカナダ研究会であっただろう。そのために、カナダ大使館などを通じて、いろいろと働きかけを実施してい

たのである。その結果、デューフェンベーカー首相訪日時には、その努力が実り、一〇月三一日の首相来訪とともに、研究会メンバーとの懇談も実現する。その上に、十一月一日にはカナダ放送協会 (Canadian Broadcasting Corporation = CBC) のテレビで、当該研究会の活躍が、カナダ全土で放映された。その放送をみて、慶應義塾大学への交換留学をおえたばかりの、ブリティッシュ・コロンビア大学の女子学生からは、当該研究会に対し、書簡にて「協力の申し出」すらあった。⁽³⁶⁾

当日の様子をみてみよう。四谷キャンパス内の上智会館に、デューフェンベーカー首相夫妻が到着したところ、大泉孝上智大学学長、ニコラス・ルーマル (Nicholas Luhmer) 上智学院理事長、フォルテン神父のみならず、これらカナダ研究会メンバー全員が出迎えた。訪問の目的は当時の『上智大学新聞』によると、カナダセンター業務の「視察」であり、「日加両国間に果たすカナダセンターの役割に大いに期待している」と、加首相は発言している。またこのように、一国のトップである、カナダの内閣総理大臣が上智大学を公式訪問し、学生メンバーと歓談することは、「上智大学創立以来、初めての出来ごと」であり、メンバーには「強い刺激」となったと、当時の機関誌は記している。⁽³⁷⁾

その直後の十一月二日から五日までは大学祭である、ソフィア祭開催期間になっていた。そのために、このカナダ研究会は「目で見るカナダ」と題した展示も行った。特にカナダ観光と世界主要国の比較から見た日加両国の生活部門を設けて、学内外のカナダに関する知識普及に努めていた。展示の趣旨は「カナダの国民の生活の態度がアメリカに次いで高いこと、又カナダは新しい国で、現在急速にその国力を増しつつあり、その将来が如何に期待されているかということ」

にあつた。⁽³⁸⁾

これら開催の成功も、駐日カナダ大使館と在日カナダ人による絶大なる支援のたまものであり、カナダ研究会の学生は感謝とともに、カナダに関する知識欲のさらなる向上を目指していた。また、デューフェンベーカー首相は、上智大学に対しても、歓迎に対する謝意とカナダ研究促進のために、カナダ大百科事典全一〇巻を寄贈する意向を示している。⁽³⁹⁾

このように、学生メンバーを巻き込む形で大きな影響を及ぼした、デューフェンベーカーによる訪問だったが、直後に執筆された『上智大学五十年史』では、特筆されるべき項目となっていない。別の現役首脳の訪問があつたことが、その欠落要因のひとつかと想定できる。⁽⁴⁰⁾ 実は、上智大学の初代学長ヘルマン・ホフマン (Hermann Hoffmann) 神父が、ドイツ人であり、「ドイツ人教授が圧倒的に多く、ドイツ語の上智などといわれた」こともあり、現役のドイツ連邦共和国(西ドイツ)首相が、すでに上智大学を訪問していたのであつた。西ドイツのコンラート・アデナウアー (Konrad Adenauer) 連邦首相が、一九六〇年三月二一日に上智大学を訪問。上智は、アデナウアーに対して、最高の栄誉たる「名誉校友」の称号を贈つたのに対して、アデナウアーは、日独関係を踏まえた講演をしつつ、理工学部予定地の地鎮祭^{じちんさい}入^{いれ}れなどにも参加している。やはりアデナウアー首相がカトリック教徒だったことも、関連しているだろうが、カナダ首相来学は上智大学による正式の歴史叙述では、西ドイツの陰に隠れていたようだ。

VII おわりに―デューフェンベーカーにとつてのキリスト教と大学

当時、二四五校にのぼる日本の大学から、プロテスタント系とカトリック系の二大学を選んだことの要因としては、やはりカナダ首相の宗教心が、一番大きいだろう。一八九五年にオンタリオ州で生まれたデューフェンベーカーは、教師の父親のもとに長男として生まれ、八才でサスカチュワン州に移り住んだ。父はメソジスト派のキリスト教徒で、母はバプティスト派のキリスト教徒だったが、信仰心がより強かった母の説得により、父がバプティスト派に改宗。日曜日の礼拝式に必ず参加する、両者とも敬虔な信徒だったために、デューフェンベーカーも、敬虔なバプティスト派キリスト教徒として生まれ育つてきた。⁽⁴¹⁾

その上、二一世紀の視点から見逃しがちな要因として、本論は関西学院の日本における相対的な重要性も、当時の文脈から指摘したい。一九五〇年代後半や六〇年代の関西学院は、二一世紀現在よりも、ある意味メジャーな地位を占めていた。東京圏に比べて関西圏の商業都市としての、相対的地盤沈下はまだ起きていないし、入試難易度でも、関西学院大学はかなり上位に位置していた。たとえば、大学受験難易度では、一九六一年の全国商経学部ランキングで、関西学院大学経済学部は、全国で第二八位（私学で第四位）にランクインされている。⁽⁴²⁾

さらに、ほかのプロテスタント系大学の中での関西学院大学の地位も、勘案すべき要因となる。たとえば、昨今皇族の卒業生を生むことでも、大学業界では有名になった名門、国際基督教大学（International Christian University＝ICU）創立には、関西学院大学も多々協力している。⁽⁴³⁾一九五三年の創立には、当時、産業心理学と英語を教えていたアーサー・マッケンジー（Arthur

McKenzie)をはじめとする、関西学院大学の教員が参加した事実があるからだ。しかしこのこともよく知られているとは、言い難いかもしれない。そのプロテスタント系のICUは、まだ創立九年目でもあり、今回のディーフェンベーカー来日において、訪問大学には選ばれていない。

上智大学にしても、一九五七年四月までは女子学生の入学を許可しない、男子大学であり、知名度、人気度、卒業生の評価などの面では、それほど高いものを持っていなかったと、推察できる。

ただし、今回、関西学院にしたように、わざわざディーフェンベーカー夫妻が訪れ、カナダ大百科事典の上智大学への寄贈を約したことも、重要である。これはやはりオントリオ州出身の英仏語バイリンガル教授のフォルテン神父が、日本で最初のカナダ研究センターを樹立したことへの謝意であつたろう。そのほかに、ディーフェンベーカー首相の政治的立場を考慮すると、仏語系カナダやカトリック教徒への政治的アピールも、要因として挙げられる⁽⁴⁵⁾。

いずれにせよ、ディーフェンベーカー首相夫妻の公式訪日は、日本でほとんど知られていないカナダという国の知識普及には、当時の基準でかなり貢献したと判断できる。とりわけ、限られた日程と時間内に、関西学院大学と上智大学を公式訪問したことは、その後のカナダ研究発展の礎を築いたとの評価も可能である。カナダ大百科事典が二校に贈られたが、それらを参照することだけでも、カナダに関する知識獲得に有用だからである。ただし、最近のディーフェンベーカー外交再評価の文脈では、日加関係やディーフェンベーカーの対日政策は、「カナダにとっての伝統的な英連邦のパートナーであるインドおよびパキスタン」⁽⁴⁶⁾ほどのアジアにおける「主要接点 (principal contacts)」とはならなかったと、指摘されている。確かにそのような面はあろう。吉田健正が指摘しているように、一九六〇年代はカナダ研究の「萌芽期」であり、一九七四年の

田中角榮首相とピエール・トルドー首相との会談も、ひとつの「機運」となり、日加の民間交流、相互理解、そして相手国研究は急速に進展した。⁽⁴⁷⁾それまでは、あくまでも萌芽的であったものの、カナダ首相訪日が、いわばカナダ研究の種を撒いたとも捉えうる。上智大学のカナダ研究会の学生が指摘しているように、そもそも一九六一年当時では、カナダの存在自体が、日本ではあまり認識されておらず、なおかつ日本のこともカナダでは知られていなかったことにも、注意を払わなくてはならない。

カナダについての知識が、ほとんど普及していなかったのが、当時の国内状況だった。それに對して、本論で吟味したように、たとえば、上智大学の学生有志によるカナダ研究会は、かなりの熱意と資源をかけて、機関誌すら発刊していた。さらにその主要メンバーだった、金子操にいたっては、まだまだ珍しかった、カナダの大学院留学をも成し遂げ、『留学と私』というタイトルでの出版活動まで行っている。⁽⁴⁸⁾また、関西学院大学でも、デューフェンベーカー首相の日曜礼拝式参加は、キリスト教徒教職員を中心に、きわめて好意的に受け止められた。最後に、カナダ首相の訪日に関する、否定的な日本国内の主要マスメディア報道がほとんどなかったことから、⁽⁴⁹⁾訪日はそれなりの貢献をしたと解釈できよう。

*本論執筆にあたり資料提供などで、グレッグ・ドナヒー教授、鈴木直子氏、寺内美佐子氏、故ゴードン門田氏、井口貞三氏、神崎高明教授、池田裕子氏、魚住英子氏、石野利香氏から多大なご支援を頂戴した。ここに記して深く感謝したい。

【注】

- (1) 対照的に戦後のカナダ外交にとって最も重要な対米関係については、いろいろな研究蓄積がある。たとえば、拙著『カナダ・アメリカ関係史―加米首脳会談、1948～2005』（彩流社、二〇〇六年）やLawrence Martin, *The Presidents and the Prime Ministers: Washington and Ottawa Face to Face, The Myth of Bilateral Bliss, 1867-1982* (Toronto: Doubleday Canada, 1982); Edelgard Mahant and Graeme S. Mount, *Invisible and Inaudible in Washington: American Policies toward Canada* (East Lansing: Michigan State University Press, 2000). などや参照せよ。最近の理論的加米関係の研究としては、Greg Anderson, "David and Goliath in Canada-US Relations: Who's Really Who?" *Canadian Foreign Policy Journal* Vol.25, No.2, (2019): 115-136. が示唆に富む。
- (2) 当時の新聞によると、カナダ首相名を「ジーフェンベーカー」と記す『朝日新聞』のような例もあるが、日本カナダ学会などで通例化しているように、本論では「デーフェンベーカー」を用いる。
- (3) この点を最初に指摘した文献として、池田裕子「関西学院とカナダ」『KG Today』vol.258 (二〇一〇年六月) https://www.kwanset.ac.jp/yoshioka/yoshioka_002921_2.html (二〇一九年四月二〇日アクセス) がある。
- (4) この点については、Janice Cavell, "Introduction," and Ryan M. Touhey, "Conclusion," in *Reassessing the Rogue Tory: Canadian Foreign Relations in the Diefenbaker Era*, ed. Janice Cavell and Ryan M. Touhey (Vancouver and Toronto: UBC Press, 2019): 3-22, 279-286. を参照せよ。この論文集は、後述するデニス・スミス (Denis Smith) の研究に対する建設的反論 (再評価) も兼ねているが、時系列にそった包括的な伝記ではなく、トピックごとにまとめた研究となっている。
- (5) 外交政策に関連して一九五七年と一九五八年総選挙争点を取り上げた最近の研究としては、Janice Cavell, "The Spirit of 56: The Suez Crisis, Anti-Americanism, and Diefenbaker's 1957 and 1958 Election Victories," in *Reassessing the Rogue Tory*, 67-84. や 84。

(6) 以上の状況は、拙著、『カナダ・アメリカ関係史』、第三章による。スエズ危機時の国連平和維持軍は正式には、国際連合緊急軍 (United Nations Emergency Force = UNEF) であり、これにより、翌年ピアソンはノーベル平和賞を受賞している。なお、カナダは二院制をとっているが、上院議員の任命権を首相が持つために、政策は下院議会を中心に実施されるし、外交・防衛の権限はカナダ首相に集中している。

(7) 以下の核弾頭装備事件や不信任案可決などについては、拙著『カナダ外交政策論の研究―トールドー期を中心に』(彩流社、一九九九年)二〇八―二一三頁と最近の研究としては、Patricia I. McMahon, *Essence of Indecision: Diefenbaker's Nuclear Policy, 1957-1963* (Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press, 2009), esp. Introduction, chap. 6, Conclusion; Asa Mckercher, *Camelot and Canada: Canadian-American Relations in the Kennedy Era* (New York: Oxford University Press, 2016), esp. Introduction, chap. 6, Epilogue. を参照せよ。なお、核弾頭装備については、ケネディ政権前のドワイト・アイゼンハワー (Dwight Eisenhower) 政権時代から、米国はカナダに対して望んできており、一九五〇年代後半にディーフェンベーカーも受け入れることを、原則的に約していたが、実現せず、キューバミサイル危機などで、北米防衛の齟齬が露呈した。その後、一九六三年総選挙で勝利したピアソンは、自国内の米軍兵力の核武装に正式な許可を出し、カナダ供出NATO軍とNORAD軍にも核弾頭装備する協定を、ケネディ政権と締結し、実行していく。拙著『NORAD 北米航空宇宙防衛司令部』(中央公論新社、二〇一五年)第一章及び第二章も参照せよ。

(8) 以下の様子は、John G. Diefenbaker, *One Canada: Memoirs of the Right Honourable John G. Diefenbaker: The Years of Achievement, 1957-1962* (Toronto: Macmillan of Canada, 1976), 116-117. による。後述するように、この回顧録における日本に関する話題は、ほかには日系カナダ人に関する事項のみである。

- (9) ロビンソンの生涯と回顧録について <https://www.theglobeandmail.com/news/politics/basil-robinson-was-an-effective-aide-to-diefenbaker/article8434915/> (11019年五月一五日トナマク) へ H. Basil Robinson, *Diefenbaker's World: A Populist in Foreign Affairs* (Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press, 1989), xiii, 281, 346, 346, 346。この本は「ロビンソンとよめ」当時の日本はメキシコ、アメリカ、北アメリカ並みの重要性があったとも判断できよう。
- (10) 以下は Robert Spencer, "External Affairs and Defence," and Donald Forster, "The Economy," in *Canadian Annual Review for 1961*, ed. John T. Saywell (Toronto: University of Toronto Press, 1962), 115, 214-215, 466, 466。
- (11) この点については Richard A. Preston, *Canada in World Affairs 1959 to 1961* (Toronto: Oxford University Press, 1965), esp. 78, 89-90, 103, 219, 227, 250, 262, 295, 295。
- (12) Denis Smith, *Rogue Tory: The Life and Legend of John G. Diefenbaker* (Toronto: McClelland & Stewart, 1995), esp. chaps. 10, 11, など。戦後のカナダ首相の伝記としては、この本は最高レベルで「決定版」ともみなしうる。出来具合となっている。しかし、一九五七年総選挙で、デューフェンベーカーが打ち破ったサンローラン首相の「決定版」と言えるような伝記は、二〇一九年九月現在で発刊されていない。
- (13) 以下の記述の出典はそれぞれ Keith A. J. Hay, ed. *Canadian Perspectives on Economic Relations with Japan* (Montreal: The Institute for Research on Public Policy, 1980) ; Frank Langdon, *The Politics of Canadian-Japanese Economic Relations, 1952-1983* (Vancouver: University of British Columbia Press, 1983) ; Klaus H. Pringsheim, *Neighbours Across the Pacific: Canadian-Japanese Relations, 1870-1982* (Oakville: Mosaic Press, 1983), esp. 126-129; Patricia E. Roy, "Reopening the Door: Japanese Remigration and Immigration, 1945-68," in *Contradictory Impulses: Canada*

and Japan in the Twentieth Century, ed. Greg Donaghy and Patricia E. Roy (Vancouver and Toronto: UBC Press), esp. 166. を参照せよ。

- (14) Jim Campbell-Miller, Michael Carroll, and Greg Donaghy, "Tilting the Balance: Diefenbaker and Asia, 1957-63," in *Reassessing the Rogue Tory*, esp. 214. を参照せよ。ちなみに、この章で上智大学訪問は割愛されている。なお、共著者の一人である、カナダ外務省外交文書館館長(当時)のドナヒーは、二〇一五年度秋学期(二〇一五年九月～二〇一六年一月)に、関西学院大学カナダ研究客員教授を務めた経歴もあり、その点でも、デューフェンベーカー首相の関西学院大学訪問を特筆しよう。

- (15) これらの事柄は、大熊忠之「戦後カナダ外交における普遍主義と対日関係―日加関係、一九四六～六八年」『国際政治』第七九号(一九八五年)、特に一〇〇～一〇二頁を参照。なお、この論文の改訂版は、馬場伸也、大熊忠之「戦後日本・カナダ関係の展開」、ジョン・シュルツ、三輪公忠編『日本とカナダ―21世紀への架け橋』(彩流社、一九九一年)、特に二五六～二五七頁として所収されている。

- (16) 以下の首脳会談などの様子は、『朝日新聞』一九六一年一〇月二三日、一頁、二七日夕刊、一頁、『讀賣新聞』一九六一年一〇月二六日、一頁、一〇月二九日夕刊、一頁、一〇月三二日夕刊、五頁、一月一日、一二頁、『毎日新聞』一九六一年一〇月二八日夕刊、一頁、一〇月二九日、一頁、『日本経済新聞』一九六一年一〇月四日、一頁、一〇月二七日夕刊、一頁、一〇月二八日夕刊、一頁、一〇月二九日、一頁、一〇月三一日夕刊、二頁、十一月一日、一頁、三頁を参照した。

- (17) 以下の日加会談や争点については、脚注の(16)に加えて、"Mr. Diefenbaker Visits Japan," *External Affairs*, Vol.13, No.12, (December 1961): 407-411; *Documents on Canadian External Relations*, 1961, Vol. 28, ed. Janice Cavell (Ottawa: Foreign Affairs and International Trade Canada, 2009): 1305-1309. を参照せよ。特にステンレス製食器やポリビニールボタンの対加輸出

- 粹削減を、日本側は望んでいた。なお、一九六四年四月には、日本のOECD加盟が、正式に認められたが、池田は首相だったものの、カナダの首相はピアソンに交代していた。
- (18) これらの点とブル大使によると、ディーフェンベーカーと池田の個人的関係は極めて良好だったとの回顧は、Pringsheim, *Neighbours Across the Pacific*, esp. 126-129, 132-137, を参照せよ。
- (19) この点は、大熊「戦後カナダ外交における普遍主義と対日関係」九五頁による。
- (20) この点は、Mr. Diefenbaker Visits Japan, 407. をみよ。なお、「日課を読み上げる」とは、聖書の一節を引用する形で説明するところを指す。
- (21) 以下、本章の情報の出典は、すべて Canada, Department of External Affairs, Confidential Files, Visit of the Canadian Prime Minister to Japan, 1961, April 11, 1960 to Oct. 14, 1961, File No.4606-C-21-1-40, Vol. 1; Canada, Department of External Affairs, Confidential Files, Visit of the Canadian Prime Minister to Japan, 1961, Oct. 11, 1961 to Nov. 10, 1961, File No.4606-C-21-1-40, Vol. 2. Provided by Greg Donaghy to the author by an email dated June 4, 2019. による。
- (22) 五人とは、グレアム、マクロードとシユア以外には、経済学部専任講師のジェイムズ・サロー (James Thurlow) とヘンリー・ウォーケンタイン (Henry Warkentyne) であった。
- (23) 『関西学院新聞』一九六一年一月三日、三頁を参照せよ。
- (24) 以下のグレアムについては、教え子だった井口貞三「ベッツ先生に寄せて」『学院史編纂室便り』第四六号 (二〇一七年二月一日) 六〇八頁、<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/gakuinshi/upload/2017/11/46TI.pdf> (二〇一九年五月二三日アクセス) と倉田和四生「第三部教師紹介、三定年退職された方々、L・B・グレアム (途中退職)」『関西学院大学社会学部三十年史編集委員会編『関西学院大学社会学部三十年史』(関西学院大学社会学部、一九九五年) 六三〇～六三二頁を参照。

- (25) 以上のグレアムに関する記述は、武田建「第一部社会学部の歩み、第一章社会学部の前史、三文学部社会事業学科の歩み」と中野秀一郎、武田建「第一部社会学部の歩み、第五章改革の推進、六国際化の推進、(二) 外国人研究者による教育活動」関西学院大学社会学部三十年史編集委員会編『関西学院大学社会学部三十年史』、特に、七一頁、二八一―二八二頁と『カナダ首相J・G・ディーフェンベーカー関係資料』、関西学院百年史編纂事業委員会編『関西学院百年史 通史編II』(学校法人関西学院、一九九八年)、二二四、二二三、二八二、五二〇頁による。なお、グレアム自身によると、一九六三年から一九六四年にかけて、一時期、関西学院大学を離れていたようだ。Lloyd Graham, "Greetings from Dr. L. B. Graham," 関西学院大学英語研究部創部100周年記念事業委員会『関西学院大学英語研究部(ESS) 100年史』(関西学院大学英語研究部創部100周年記念事業委員会、一九九八年) 八―九頁をみよ。

- (26) 以下の新約聖書の引用は、<https://www.wordproject.org/bibles/jp/44/17.htm> (二〇一九年九月二六日アクセス) による。

- (27) 以上のディーフェンベーカーの回顧録と日系カナダ人に関する情報は、John G. Diefenbaker, *One Canada: Memoirs of the Right Honourable John G. Diefenbaker, the Crusading Years 1895 to 1956* (Toronto: Macmillan of Canada, 1975), esp. 222-224, を参照せよ。なお、カナダの場合、自由党は進歩保守党よりも、自由よりも平等を目指す左派とみなされることがあるが、党首や首相の政策選好やその時代の状況により、実際の政策は左右する。ディーフェンベーカーは、戦時中の日系カナダ人権利擁護のために、何度も発言しているし、英国や豪州などと異なり、南アフリカのアパルトヘイト(人種隔離政策)に断固反対し、英連邦から南アフリカを脱退させるのにも、寄与している。さらに、日系カナダ人の抑留に対する損害賠償補償を、一九八八年に実施したのは、仏語系カナダ人の権利を重視した自由党ビエール・トルドー(Pierre Trudeau)ではなく、進歩保守党のブライアン・マルルーニー(Brian Mulroney)であった。

- (28) 以上の小宮院長の挨拶は、英語で実施され、筆者が訳をつけた。出典は、『カナダ首相J・G・ディーフェンベーカー関係資料』と『関西学院新聞』一九六一年一月三日、三頁による。
- (29) 小宮院長の御礼書簡は、『カナダ首相J・G・ディーフェンベーカー関係資料』を参照。
- (30) 以下の御礼書簡の出典としては、脚注の(21)を参照せよ。
- (31) 武田、「第五章 改革の推進」、特に二九一頁参照。
- (32) たとえば、ジョージタウン大学はビル・クリントン (Bill Clinton) 元アメリカ合衆国大統領の母校(学部)であり、現在のドナルド・トランプ (Donald Trump) 大統領は、フォード大学に入学後、ペンシルベニア大学に編入している。
- (33) 以上の点は、コンラッド・フォルテン『今日のカナダ』(上智大学カナダセンター、一九八三年)二八九頁とこの本に挟まれていた英文・仏文冊子、五頁による。
- (34) 以上の情報は、上智大学史資料編纂委員会編『上智大学史資料集 第4集(1948～1969)』(上智学院、一九八九年)六八頁による。
- (35) 詳細は、金子操「緒言」『かえで』第二号(一九六二年)一頁および「カナダ研究会の現状」『かえで』第二号、二～三頁による。
- (36) これらは、『Present Situation of the Canadian Study Club, "かえで"』第二号、四二～四四頁をみよ。
- (37) 以上の記述は、『上智大学新聞』一九六一年一月一日、一頁と「ディーフェンベーカー・カナダ首相来学」『かえで』第二号、四頁による。
- (38) 以上は、『ソフィア祭』『かえで』第二号、五頁による。
- (39) "Present Situation of the Canadian Study Club," 四三～四四頁をみよ。
- (40) 以下は、戸川敬一「三 創立から関東大震災迄」と巽豊彦「八大上智へ飛躍」上智大学『上智大学五十年史』(上智大学出版部、一九六三年)四八～四九、二〇〇～二〇一頁による。
- (41) 一九六〇年当時の大学数は、<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kyoken/data/02.pdf> (二〇一九年

八月五日アクセス)による。

- (42) 以上のデー・フェンベーカー自身の宗教心については、Diefenbaker, *One Canada: Memoirs of the Right Honourable John G. Diefenbaker: the Crusading Years 1895 to 1956*, 5-6, 9-10, 73-74, によろ。

- (43) 当時はまだ大学受験偏差値が開発されておらず、『蛭雪時代 付録 旺文社模試からみた大学難易度ランキング』(一九六一年八月号)によると、上位には東京大学文科一類、一橋大学経済学部、一橋大学商学部、一橋大学社会学部、京都大学、神戸大学経営学部となり、国公立大学の学部が軒並み難関校になり、私学では慶応義塾大学経済学部の第一〇位、早稲田大学政治経済学部の第一七位、慶応義塾大学商学部の第一八位に次いで、関西学院大学経済学部が第二八位となっている。(すなわち、私学の中では慶応義塾大学と早稲田大学の後の第四位が関西学院大学。)データは八万人が受けた英語・数学・国語の旺文社模試の「志望者平均点、受験者平均点、合格者平均点を按分して集計し、順位付け」している。数学が含まれるために、文系科目のみで受験可能な私学受験生には、不利な部分もあるようだ。以上すべて、実際の『蛭雪時代』をアップロードしている、Asanamaru,「香川大学の入試事情(1) 五〇年前の大学入試難易ランキング表」『ブログ 香川大学解体新書』(二〇〇八年六月二八日)、<https://ameblo.jp/ssasamaru/entry-10092068383.html> (二〇一九年八月五日アクセス)をみよ。

- (44) ICU創立の設置小委員会では、神崎驥一関西学院院長が「組織・行政部門」担当で参加したほかに、アウターブリッジ学長(その後理事長)もICU副理事長を務めた。ただし、ICU初代学長には、同志社大学総長だった湯浅八郎が就任している。これらは、C・W・アイグルハート『国際基督教大学創立史―明日の大学へのヴィジョン(一九四五―六三年)』(国際基督教大学、一九九〇年)特に四四、四九、八〇、八一、八二、一四二、二四二、三一二頁と経済学部五十年史編集委員会「第二部 経済学部の研究と教育」経済学部五十年史編集委員会編『関西学院大学経済学部五〇年史』(関西学院大学経済学部、一九八四年)特に三九〇、三九一頁を参照せよ。

- (45) フォルテン神父兼上智大学助教授については、オンタリオ州サドベリー出身で、いわゆるフランコ・オンタリアン（仏語系オンタリオ州人）だったが、上智大学外国語学部仏語学科や文学部仏文学科で教えた。これらの点は、“Mr. Diefenbaker Visits Japan,” 408.をみよ。なお、ディーフェンベーカー首相は、ほとんどフランス語をしゃべれなかったとの記録があり、その面からも仏語系およびカトリック系ケベックへの配慮もあったかと思われる。
- (46) この評価は、“Campbell-Miller, Carroll, and Donaghy, “Tilting the Balance,” esp. 214.をみよ。
- (47) 日加両政府で各々一〇〇万ドルずつ出し合い、相手国の研究助成を決定した。以上は、吉田健正「日本におけるカナダ研究の歩み」シュルツ、三輪編『カナダと日本』、三八七～四〇三頁をみよ。
- (48) 金子操『留学と私』（英友社、一九六六年）を参照。同書、五、一一～一三、二〇五頁によると、金子はディーフェンベーカー首相が来訪した際に、四年生としてカナダ研究会会長を務め、なおかつカナダ政府の奨学生として、カールトン大学大学院修士課程でジャーナリズムを二年間学び、修了している。
- (49) 無論、カナダ国内でも、カナダ首相の外訪は必ずしも高く評価されるとは、限らない。最近の失敗例としては、ジャスティン・トルドー（Justin Trudeau）首相（ピエール・トルドーの長男）のインド訪問が挙げられる。妻と子どもたちの家族連れで、八日間インドに滞在したカナダ首相は、インドの民族衣装を家族一同で来た写真が不評で、旅費が高すぎる上に、単なる家族慰安旅行のイメージを残した。さらには、過激派シーク教徒団体に属したことがあり、殺人未遂で起訴された人物を、ニューデリーのレセプションに招待し、ジャスティンの妻やインド系閣僚と写真を撮ったことも、問題視された。その結果、ジャスティンの支持率は、第一野党の保守党と並ぶほど低下した。以上は、John Ivison, *Trudeau: The Education of a Prime Minister* (Toronto: Penguin Random House Canada, 2019), esp. 226-232.を参照せよ。